2023年
（令和5年）
12月14日

むつび

石井十次の会　会報

315号

石井十次の娘・友を妻にむかえた
画家　児島虎次郎の家族

陶芸家・加計美術館 館長　　児島　塊太郎

大正2年（1913年）児島虎次郎は、5年間のヨーロッパ留学を終え、久しぶりの正月を郷里成羽で迎えています。

1月4日、大阪の小林寿美太、神戸の上田喜平、成羽の柳井新太郎、倉敷の青野俊一郎と児島虎次郎　5人は、倉敷の大原家で、虎次郎が持ち帰った滞欧作品を見ながらの夕食会に招かれました。

大原孫三郎はその席で虎次郎と岡山孤児院長　石井十次の長女・友との縁談に就いて語り、親友達の意見を求め、賛意を聞いたのです。今後、虎次郎がどの様に生活することが理想であるかなどを懇談しました。

その後、孫三郎に従い、俊一郎と虎次郎は岡山市の石井十次を訪問して、二人の結婚について話し合いを持っています。

この二人の結婚については、孫三郎は以前から石井十次の長女・友との縁談を考えて、全幅の信頼を置く、林源十郎に語り、林を通じて、石井十次にその意向を聞いていたと思われます。

その事が理解出来るのは、大正元年（1912年）12月8日の石井十次の日記に「祈祷、友子が快諾し、本日はいよいよ決定する様に導き玉へ。かく祈りて午前9時7分の下り列車にて倉敷に往き、林兄と共に大原兄を訪ひ、友子承諾の旨を告げ万事を托す」と書きとめています。

結婚式は大原孫三郎夫妻の媒酌で、大正2年（1913年）4月2日（水）午後5時、大原邸で行われました。披露宴は7時から、大原家の別荘（注：のち倉敷市へ寄贈された「新渓園」）の大広間で催され、200名近い招待客であったと伝えられています。

新家庭は倉敷酒津の大原家別邸「無為村荘」と決め、終生の修業の場とすることを決心し、大正4年（1915年）10月にアトリエを落成しています。アトリエを手に入れた虎次郎はますます精進して、日本人画家として最初のフランス・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールの准会員となります。

大正3年（1914年）石井十次は体調をくずし、宮崎県茶臼原の地で静養していましたが、ついに危篤状態となり、1月30日、ついに天に召されることになります。

1月30日の出来事については、この様な話が残っています。虎次郎の手紙・日記に「このころの妻の友は懐妊して臨月であったため、病父のことは一切秘してあった。午前零時半男児出産。午前日向より父重篤の報来り、引き続き危篤の報来る。午後、大原氏来訪され、今夕、余は日向に出発すべく約しぬ。日没ごろ、父永眠したる由を大原氏より伝えられる。生まれたる男児は非常に健在なり。虎一郎と命名すべく予定す。」

そして宮崎茶臼原の地では、石井十次が病床の中、待ちに待った初孫の男児安産の電報を受け取り、かすかに首をふり、午後2時、昇天したと伝えられています。

この時の茶臼原の逸話は、私の父、虎一郎の人生に思いもかけぬ切っ掛けをつくる事になるのです。

さて、話をもどします。虎次郎と友が酒津の地で新婚生活を始めたことにふれましたが、その後も、虎次郎は多忙を極め、画家としての活動はもとより、ほとんどの人生を旅についやしているのです。大正2年の春、石井友と結婚して、その人生を終えるまで、ヨーロッパへ2回、中国・韓国へ4回と、海外への旅は合計6回を数えます。この夫婦が充実した生活を送くれたのは、新婚から約5年間で、その後、他界するまでの10年間はほとんど旅の人だった様に思います。

この度のお話の中で、虎次郎から妻・友への手紙2通を紹介して、二人がどの様な思いをして生活していたのかを書いてみます。

大正9年（1920年）6月4日、フランス・パリよりの手紙「4月26日出の御手紙を拝受した。虎一郎の文字は最も我心を誘うものなりしが、御許の手紙を再読して、誠に何とも済まぬ心地がして痛心に堪えず。我が軽慮なりし事を悔むも、後の事にて及ばず。まず御手紙の返事として、本日この手紙を同時に小生より林さんに依頼して、五百円借用する様に運ぶべければ、もし、林さん承諾下されば早速御身の上に御廻しあるべくはずとなるべし。（途中略）虎一郎の重患なりし事など心配の続きで心細かりし事を深々と同情の念に堪ず。物質上の問題は全く小生の申し訳なき様の次第にて、一層心痛を増したる事ならむ。」と書き送っています。この事は、虎次郎が家庭的に何かあった時のためにお金を用意していなか

った事で、妻・友が大変な事になっている様子を知り、お詫びの手紙を書いています。その他、この手紙には、パリで開催されたサロン・ソシエテ・ナショナルに出品した作品「オートンヌ」がフランス政府の買上げとなり、ルクサンブル美術館に収蔵されサロン・ソシエテ・ナショナルの正会員に推挙された事もつたえています。こうした悲しみや喜びを二人で共有しながら生活していた事も理解出来ます。この手紙の最後には、「虎一郎、廣子など誠に可愛想なるものを旅情にむせぶ事も堪えず候と船中より一個音信に接せらるるため、ただ想念に堪ざりし。日本の母上（辰子）には毎度心配をのみかけて済まぬ事なり。大原、三橋、林、石井母上へは小生より、各礼状差し出すべし」と心温まる内容の手紙が続きます。

さて、もう一通の手紙をご紹介します。この手紙は先に紹介した手紙の後に妻に宛てたもので、夫婦の子供に対する愛情があふれていますが、次の手紙は、自分達が生きていく上での指針を書き示しています。（前半は略）

「石井父上が小生に対する遺言は『君等夫婦、誠真誠意大原家の為に尽せよ』この遺言は父上が誠を込めて余の手を強く握られて語られた言葉に候。人には誰も不満の心湧くものに候。小生も時にこの父上の遺言繰り返して自誓する事たえからず候。この遺言は余が真誠を期して尽すべきものにて、今更石井父上より申しおくまでもなく、余が一生はこの務めに至りと存じ候。大原家を敬し、大原家に忠誠を尽くす事は、これ石井父上遺言と希望を余うするものと存じ候。前述の事は今まで親しくあなたに語る機会なかりしが、小生の留守中、妻として母として、そして石井の遺子として、ただ晴朗たる尊敬の念によりて、大原家に対されたく候。此の夏、日向におもくむ由、決して差し支えあるまじく、留守中は実に言い尽くせざる心労をかけて誠に相済まず深く感謝し居り候。」と家族を中心とした内容の手紙を送り、主人のいない家族へ常に励ましの言葉を書いているのです。この二つの手紙を見るだけでも、虎次郎と友夫婦の一念を察する重要な手紙であると思い、友愛社と石井十次の精神を守る皆様にご紹介いたしました。

さて、私は約40年間、児島虎次郎研究を重ね、虎次郎から妻・友への手紙や葉書を読破していますが、不思議な事に、妻・友から虎次郎あての手紙が一通も見つかっていないのです。あれほど妻や子供達に手紙や葉書を書く事を強要しておきながら、書いた手紙に日付がないとか、子供達の手紙の添削までして送り返すなどしていて微笑ましくさえ思います。

私は祖母・友に可愛がられ、祖母は常に虎次郎の遺愛品を宝物の様に大切にしていた姿を見ているので、なぜ祖母が自分で書いた虎次郎あての手紙を残さなかったのか不思議でならないのです。

結婚当初の手紙から読み解くと、かなり「若気の至り」的な内容の手紙が来ていて、それを一生懸命諭すように、虎次郎は返事を書いています。つまり、年若き妻・友が日常の不平不満を認め、夫・虎次郎に送っていたのではないでしょうか。

虎次郎と友の年齢差は9歳もあり、ましてや、日本女子大学を卒業して間もない女学生と言っても良い女性でした。片や、虎次郎は一人暮らしが長く、料理、洗濯、アイロンまで自分で掛けていたそうですので、新婚当初はかなり、虎次郎の手を煩わしていたのではないかと思います。

私の手もとにあった、大原孫三郎が写した酒津での新婚当時の二人の姿は大変ほほえましく、孫三郎自身も心配で度々酒津を訪れています。2度目のヨーロッパ留学までに二人の子供も出来て、家庭的には大変幸せな生活が送れたのですが、虎次郎の制作上の悩みはますます大きくなり、それを見かねた孫三郎はついに2度目のフランス留学を促します。

大正8年（1919年）5月6日神戸港より、第一次世界大戦直後のヨーロッパへ向けて出発します。当時、フランスの入口であったマルセイユ港は戦禍の為に入港する事が出来ず、ヨーロッパの入口はイギリスのサウサンプ港で、かなり大廻りをしてフランスのパリに到着しています。

先に紹介した、虎次郎の妻・友あての手紙は、まさにこの旅で書かれたものです。

家族を日本に残して留守をする心情がひしひしと伝わり、芸術家とその妻の支え合う姿を垣間見る事が出来ます。

この手紙に登場する虎一郎は私達兄弟と妹の父親ですが、虎次郎が6歳で父を亡くした様に、虎一郎も15歳で父を亡くしています。親子とも母子家庭で育っていますので、父親に対する思いは人一倍強いものがあった様に思います。

私の父は、母親の友が宝物の様にして大切にしていた虎次郎日記や手紙、そして遺愛品等を受け継ぎ、これらを又、私が引き継ごうとしたのですが、父はなかなか手放そうとはしませんでした。母が私と父の中に入り、ようやくこの問題を解決する事が出来ました。

この資料の相続は昭和時代の終り、約40年ぐらい前に成立し、ようやく私の児島虎次郎の顕彰と研究が始められる様になったのです。今回のこの原稿もこうした取り組みの中から生まれたものです。

令和6年（2024年）は父・児島虎一郎の生誕110年の祝いの年であり、石井十次没後110年の年でもあります。父は生前「私は祖父石井十次が死んだ年に生まれたので一度も誕生日を祝ってもらった事がない。1月30日は常に石井十次の記念式が行われ自分の誕生を祝うどころではなかった。」と言っていました。

なるほどと思いますが、父にとっては小さい時からそれを感じていたと思うと、せめて生誕110年の祝いは、石井十次の没後110年の記念式典とは別に、盛大に生誕110年の祝いが開催出来ればと願っています。

夏休み焼肉交流会

西諸支部　副支部長　　廻　芳朗

　私は石井十次の会に２年ほど前に入会いたしましが、あまり会の行事には参加していませんでした。この度初めて年 １回の園の子ども達との焼肉交流会の行事があるということで参加しました。

　日時は令和5年8月11日、場所は高原町にある神武の家でした。

　最初は駐車場でやる予定でしたが、雨が降ってきたので、家の玄関先で肉を焼き、交流スペースで交流会を行うことになりました。

　肉の量が多いので、焼くのに時間がかかり、子ども達は最初おとなしく待っていましたが、臭いがしだすと途中からははしゃぎだし、その うち玄関先へ集まりだしました。肉が次々と焼きあがってくると、みんな皿に肉を盛ってもらい、テーブルへ持っていく手伝いを喜んでしてくれました。

　準備ができて子ども達、職員、我々会員でパーティーが始まりました。子ども達は口を大きく開けて、焼肉を美味しそうに食べて満足しているみたいでした。又、年長の子は年少の子ども達の面倒をよく見ていました。まるで実の兄弟のように思えました。

　又、年少の子ども達の合唱があり、力一杯歌いパーティーを盛り上げていました。

　食事が終わったらビンゴゲームが始まりました。ゲームではなかなか思った数字がでず、子ども達の中にはイライラしたり、外れてため息がでたりする始末でした。

　子ども達が力を合わせて一生懸命明るく生きている姿を見ると、来年も交流会に参加したいと思う１日でした。

編集委員だより

野生動物との共生

今年も甘いスイカや実がぎっしり詰まったスイートコーン、メロン、赤く実ったトマトをたくさん収穫し、孫や近所の方たちを喜ばせたい。心弾ませ、入念に畑の手入れを行ったのは初夏の風薫る頃。

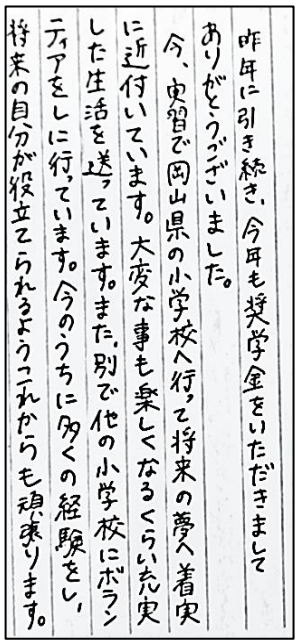
昨年、野生動物の被害に遭った嫌な思い出が残るスイカは、新たな栽培方法に挑むことにした。動物の手の届かない高さで宙づり栽培するのだ。スイートコーンは、昨年最も被害が少なく豊作だったことから、周りを簡単に囲むだけにした。また、倉庫にある支柱や棒をかき集め、人が一人やっと入れる程のハウスを作り、そこでトマトを栽培する。

五月～六月、どの作物も順調に育ち、昨年にも増して豊作になることは間違いない。そう思うと、ワクワクして家から畑までの片道一時間の運転も全く苦ではなかった。二十数個のスイカが日に日に大きくなり、そのうちの数個が食べ頃を迎え夫と私はほっとした。宙づり栽培はうまくいったと思った。「あと二～三日したら、あれ、収穫しようや。」このやり取りを野生動物は聞いていたのか、翌朝、見事にかじられていた。お気に入りのスイートコーンに至っては、どこからともなく侵入し毎日五～六本ずつもぎ取り、片付けもせずどこかへ消えていく。その度にこちらも作戦を練るが、かなわない。結局、イタチごっこの末の軍配は野生動物に上がってしまった。それでも、八月初め、一年ぶりに帰省する孫たちのために、食べ頃のスイートコーンを十本程度残しておいてくれたのはありがたい。野生動物にとって餌が減ってしまった今、共生する覚悟が必要かもしれない。

編集委員　　黒木　三鶴

方舟館からのお知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。


昨年に引き続き、今年も奨学金をいただきまして
ありがとうございました。
今、実習で岡山県の小学校へ行って将来の夢へ着実
に近付いています。大変な事も楽しくなるくらいた実
した生活を送っています。また、別で他の小学校にボラン
ティアをしに行っています。今のうちに多くの経験をし、
将来の自分が役立てられるようこれからも頑張ります。

★石井十次の会　給付型奨学金について

今年度奨学金を受けている卒園生から、お礼のメッセージがたくさん届いています。紙面の都合上、一名だけご紹介します。みんな楽しく生活しながらそれぞれの目標に向けて頑張っているようです。会員のみなさまのご厚意に深く感謝いたします。

★１月号の通信発送作業は、友愛社職員と子どもたちで行います。

★新会員のご紹介（敬称略）
【宮崎市】仙石　正男　黒木　亜矢【都城市】乙丸　治子【日向市】小川修
【高鍋町】田中　等【門川町】富高　孝子【埼玉県】末藤　順平

★ご寄付をいただきました（敬称略）
【宮崎市】石井　献二郎　　野坂　敬　　永吉　洋次　永吉　智子
【日向市】山本　孫春【新富町】山西　三重子【木城町】長友　英親
【愛知県】田爪　光信

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。
〒 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人　石井記念友愛社後援会
石井十次の会　　TEL/FAX　0983-32-4612
ﾒｰﾙ　yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記
巻頭言には陶芸家で加計美術館長の児島塊太郎様から玉稿をいただきました。児島虎次郎と妻・友との生活が克明に書き記してあり、関心を持って拝読いたしました。ありがとうございました。　（編集委員　黒木　三鶴）